

日本昔話「瓜子姫」について爺婆の視点から考える

著者	千野 美和子
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	57
ページ	9-19
発行年	2019-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000941/

日本昔話「瓜子姫」について爺婆の視点から考える

千野 美和子

I、初めに

ここで取り上げる日本昔話「瓜子姫」は、瓜から生まれた女の子を主人公にした本格昔話であり、東北から九州まで広く分布している（稲田ら、1994）。物語の筋は、「桃太郎」に通じる異常誕生、機織り、アマノジャクの妨害をへて、幸福な結婚までを語るのが整った型としている（稲田ら、1994）。

柳田（1962）は、『桃太郎の誕生』の中で、「桃太郎」の昔話の歴史を研究する上で比較研究できる昔話として「瓜子織姫」を取り上げ、「桃太郎」の女性主人公版として桃太郎の筋をもとに論じている。

この物語の大きな特徴として、桃から生まれた「桃太郎」同様、瓜という植物から生まれた異常誕生、そして主人公を妨害するアマノジャク（註1）という敵が登場すること、そして、整った筋として挙げられる幸福な結婚いわゆる幸福な結末がある一方で、瓜子姫（註2）がアマノジャクに殺されるという正反対の結末を持つ物語も多く存在することが挙げられる。前者は西南日本に多く、後者は東北、北陸地方に多いとされ、地域差があるという（稲田ら、1994）。

また、文献に残っている最古の記録としては室町期のお伽草子『瓜姫物語』があり、大きくは前述した昔話の筋と同じ、結末は幸せな結婚となる（稲田ら、1994）。

柳田以後の「瓜子姫」研究は民俗学のみならず、この昔話の日本独自性や世界の昔話の中での共通性についての研究（関、1774；稲田、1992；高木、2013）、またこの昔話が生まれた背景となった神話や歴史との繋がりなど幅広い研究（猪野、1978；荒川、2004；藤井、2013）が行われている（註3）。これらの研究を元にしなが、本論では、主人公の瓜子姫がアマノジャクの妨害を受けることによる物語の展開とその結末について、初めの登場人物である爺婆の物語として考えてみたい。

筆者は以前から日本の昔話がいわゆるグリムメルヘンのような幸福な結末が少ないことに関心を持って

た。この日本的な終わり方について臨床心理学者の河合（1982）は日本人のこころの有り様の特徴として論じている。しかし、日本の昔話にも幸福な結末を持つ昔話もあり、筆者は以前それについて論じたことがある（千野、2013）。本論で取り上げる「瓜子姫」は日本独自性を持つ昔話である一方、主人公の瓜子姫が幸福になるものと不幸になるものの両方がある事が興味深いと考えている。二つの正反対の結末についても爺婆を主人公とした物語としての視点を入れて検討したい。また、この昔話の中心テーマともいえるアマノジャクが瓜子姫に化けて花嫁となるモチーフはグリムメルヘンを初めとして「偽の花嫁」として世界各地に存在する。このテーマについても検討したい。

まず、「瓜子姫」の話のあらすじ、幸福な結末と不幸な結末の両方を提示し、関・稲田の挙げる昔話のタイプから、この話の特徴を明らかにする。両タイプで重要と思われるモチーフを取り出し、その後類話を参照しながら物語の内容について考察したい。

II、話のあらすじ

ここではまず2つの物語のあらすじを提示する。

1つは柳田（1962）が挙げている島根県石見邑智郡の話である。幸福な結末である。

昔々、爺と婆とがあった。婆は川に洗濯に行った。川上から瓜が流れてきた。瓜を拾い上げて、持って帰って櫃の中に入れておいた。切ろうとすると、瓜はひとりで二つに割れて、中からお姫様が出てきた。爺と婆は大喜びであった。そのお姫様が毎日機を織る。ある時二人の留守の日に、アマンジャクがやってきて「手の入るほどでよいから開けてくれ」、「頭の入るだけ」、「体の入るだけ」ととうとう戸を開けさせて家の中に入って来てしまった。アマンジャクは、姫を誘い柿の木谷へ柿を取りに行き、姫に自分の着物を着せて、柿の樹に登らせて高い枝に縛りつけた。そしてアマンジャクは姫に化けて、家に来て機を織っていた。

爺と婆とは帰って来て、それを知らずに姫を嫁にや

ると言って駕籠に乗せる。柿の木谷を通っていくと、柿の木谷の高い樹の上で、本当の姫がこれを見て泣いた。「吾が乗りて行くのに、アマンジャクこそ乗りて行くかや、ピーロロロ」と泣いた。駕籠かきは駕籠からアマンジャクを引きずり出し、姫を木の上から助けおろした。

そのアマンジャクを三つに切って、粟の根へ一切れ、蕎麦の根へ一切れ、黍の根へ一切れとその体を埋めた。粟と蕎麦と黍の根が赤いのは、そのときアマンジャクの血に染まったからだという話。

もう1つは、関（1978）が代表例としてあげている秋田県平鹿郡の話である。結末は瓜子姫が殺されてしまう話である。

ざっと昔、ある所に爺と婆といた。婆がある日川に洗濯に行くと、箱が二つ流れてきた。重い箱を家に持って帰って、中から瓜が出て瓜の中から女の子が生まれた。瓜姫と名づけて可愛がっているうちに大きくなって美しい娘さんになった。ある日爺と婆は山に行く時、天邪鬼に気をつけるようにいう。天邪鬼がやってきて戸を開けて無理やり入って来た。外に連れ出し、裏の桃の木に姫を登らせ、姫を驚かすと、姫は動転して高い樹から落ちて死んでしまった。天邪鬼は瓜姫子の皮をはいで自分は瓜姫子に化けて、家に戻って機織をしていた。瓜姫子に化けた天邪鬼が図りごとをして、長者の所に嫁に行くことになった。その日家のそばの木に鳥が飛んで来て、「瓜姫子あ乗り掛けさ 天邪鬼乗ってゆく かあ かあ」と鳴くので、爺と婆もますます怪しいことだと思って化けの瓜姫子を裏の泉に連れて行って、ごりごりと洗ってやると、化けの皮がはげて天邪鬼が現れた。爺と婆は怒って、天邪鬼を茅原の間を引っ張り回し、いじめてやったら、さんざん血を流したので、今だに茅原の茅の根が赤く染まっているということだ。

Ⅲ、この話の昔話のタイプについて

この昔話は『日本昔話大成』では、「本格昔話」の「誕生」の中の144A「瓜子織姫」としてまとめられている。

関（1978）は「瓜子織姫」の解説として、「瓜子姫は桃太郎童話とともに我が国でもっとも広く分布、また多く記録された話である（p.120）」とし、構造的に

次のエピソードからなるとしている（同、p.120）。

- (1) 子のない老夫婦。川上から流れて来た瓜の中から生まれた娘を子供として育てる。
- (2) 両親の留守中（嫁入り支度）天の邪鬼が家に侵入し、
 - a 姫を殺して自ら姫になる。
 - b 姫を誘い出して木に縛りつける。
- (3) 天の邪鬼、偽の花嫁として嫁入りする。途中で
 - a 小鳥（姫が化した）が花嫁は天の邪鬼であると鳴いて知らせる。
 - b 木に縛りつけられた姫が花嫁は天の邪鬼であることを告げる。
- (4) 偽の花嫁は
 - a 追放される。
 - b 両足を牛と馬に結わえつけ股裂きにする。

この昔話は構造的には同一であるが内容からみると東西やや明白に二つに分かれているという。「東北地方では天の邪鬼の殺害方法はきわめて残虐で、ときとしては姫の顔の皮をはがすことすらある。これに対して西日本では姫を殺すよりは誘惑して着物をはぎとって木に縛りつける程度である。これに対して天の邪鬼に対する処置はまさに逆で、東北日本ではたんに追放する程度であるが、西日本では天の邪鬼の両足を牛馬に結わえつけて股裂きする残酷な処罰を加えている（関、1978、pp.120-121）」。

また、関（1978）は瓜子姫の話も現在の形式では桃太郎童話と同じく他民族の伝承の中に類話を発見することは困難であるとするが、奄美大島で鬼婿の名で記録されている話の後半と同じ地域で記録されている「しろ鳥の姉」と比較分析する時は、ユーラシア型の「三つのオレンジ」（AT408）の亜型であることは明らかとなるとしている（註4）。

稲田（1988）はこの昔話をむかし語りⅥ誕生<異常誕生>128「瓜子」のタイプとして分類している。このタイプのモチーフは次のモチーフからなる（p.287）。

- 1、婆が、川を流れてくる瓜を呼び寄せ持ち帰って、櫃に入れておき爺とあけると、女の子が生まれている。瓜姫と名づけて育てる。
- 2、瓜姫はみるみる成長し、上手に機を織る。
- 3、爺と婆が姫に、誰が来ても戸をあけるな、と注意して出かけるが、やってきたあまんじゃくは少しづつ戸をあけさせて入りこむ。

- 4、あまんじゃくは姫を柿の実もぎに誘い出し、もいだおいしい実は食べしぶい実を投げつけるので、姫はあまんじゃくの言葉に従って着物を取り替え柿の木に登る。
- 5、あまんじゃくは姫を木にしぼりつけ、姫の着物を着て機を織る。
- 6、あまんじゃくが殿様に嫁入りしていると鳥が、あまんじゃくは駕籠の中瓜姫は柿の木、と鳴くので、人々はあまんじゃくの手足を牛と馬にくくって二つに裂き、そばと萱の根もとに投げる。そばと萱の根が赤くなる。
- 7、姫は救い出され、殿様に嫁入りする。

稲田は「東北地方を中心に、本土の東半分では姫が横死してあまんじゃくは仇討ちされ、西国では、あまんじゃくは退治され姫は救出される、という傾向がみられる。また、伝承の厚い地方では、発端の異常誕生のモチーフを欠き、もっぱらあまんじゃくと姫との葛藤を語る結果、世間話的主題となるものが並存していることが多い (p.287)」と説明している。

ATの分類に関して、関は参照タイプとしてAT408(「三つのオレンジ」とAT533(註5)をあげており、トンプソンのインデックスとしてK1991(「にせの花嫁(身替わり花嫁)」)を載せている。それに対し稲田は対応タイプとしてAT408「三つのオレンジ」を挙げている。そして、稲田(1992)は「『瓜姫』は周縁の諸民族が伝承する『姉と妹』タイプの一変形として、本土に限って独自の生成をとげてきたタイプである(p.78)」とする。AT408「三つのオレンジ」とはⅠ老婆の呪い Ⅱオレンジ姫を手に入れる Ⅲ黒人女がオレンジ姫にとってかわる Ⅳ鳩になったオレンジ姫 Ⅴ女主人公の魔法が解ける Ⅵ恋人たちの再会 かなる。

筆者は、瓜子姫が日本独自の特徴を持つことを踏まえつつ、「鬼婿」「しろ鳥の姉」を参照しながら、世界共通のモチーフである「偽の花嫁」について、考えた。

次にタイプモチーフからこの話を考察する。関は姫が助け出されるのと殺される二つの結末を入れており、二つの構造がある昔話としているのに対して、稲田は姫が助け出される幸福な結末型をモチーフとしている。筆者は本論で取り上げるべき重要なモチーフを、稲田のタイプを踏襲しつつ、後半のモチーフをまとめ

て以下のようにした。

- ①子のない老夫婦が川上から流れてきた瓜の中から生まれた娘を瓜子姫と名づけ子どもとして育てる。
- ②瓜姫はみるみる成長し、上手に機を織る。
- ③爺と婆が姫に誰が来ても戸をあけるな、と注意して出かけるが、やってきたアマノジャクは少しずつ戸をあけさせて入りこむ。
- ④アマノジャクは柿の実もぎに誘い出し、姫はアマノジャクの言葉に従って着物を取り替え柿の木に登る。アマノジャクは姫を木にしぼりつけ、姫の着物を着て機を織る。
- ⑤アマノジャクが殿様に嫁入りしていると鳥が、アマノジャクは駕籠の中姫は柿の木、と鳴く。
- ⑥アマノジャクの手足を馬と牛にくくって二つに裂き、そばと萱の根もとに投げる。そばと萱の根が赤くなる。姫は救い出され、殿様に嫁入りする。

Ⅳ、誕生

「爺と婆がいた」から始まる。爺婆の属性として「子のない夫婦」とのみ記されるものから、「どうか一人ほしい」「神に祈願して」とはっきりと子どもを望んでいる状況が物語の前提として表現される。

子どものいない夫婦が子どもを切に願う場面から始まる昔話が多い。昔話の夫婦に子どもがいないことは「新しい可能性の誕生を願いながら、なかなかそれが得られない状態(河合、1977、p.116)」といえる。この昔話の夫婦は「たにし長者」の夫婦ほど明確な形ではないが、「子どもがほしい」という強い願いを持っていたことは確かである。その夫婦の願いの中で瓜子姫が誕生する。「婆が川で胡瓜を拾い、胡瓜膾にしようとして切ると女の子が生まれる。氏神に祈ったおかげだとて胡瓜姫と名づける(関、1978、p.103)」と背景に氏神信仰が窺われる類話(註6)もある。

生まれる様子は様々であるが、爺婆の喜びが表現されている話が多い。Ⅱのあらすじでは「大喜び」「かわいがる」、柳田の諸国の瓜子姫の類話では「神の御授けと思つて大事に育て(柳田、1962、p.97)」「爺と婆とで大事に育てて(同、p.99)」と大事に育てるという表現から夫婦の瓜子姫を大切に思う気持ちが伝わる。また、「爺と婆とが子供が無いので、欲しい欲しいと思つて神様に願掛けした。或朝瓜島に行つて見る

と、瓜島のまん中に美しい女の子が一人居た。これア神様の御授けだと思つて、喜んで拾つて来て瓜子の姫と名を付けて大事に育てた（同、p.103）」と、神に子どもを願いそれを叶えてくれた神への感謝とともに子を大切に思う気持ちが合わせて表現されている。日本の昔話の底流に流れている「神への信仰」がこの昔話でも窺われる。

瓜子姫は川上から流れて来た瓜の中から誕生したことから瓜子姫と名づけられた。その他に「爺婆が大きな胡瓜ができたので家に運んでくると割れて中から女の子が生まれる（関、1978、p.107）」「神に子供を祈願し、爺が瓜畑で転がる。傍の瓜の中に娘がいる（同、p.109）」と瓜島あるいはそこで成った瓜の中から、女の子を見つける場合もある。直接川との繋がりがなくとも、瓜そのものが水神の象徴あるいは依代（稲田ら、1994）とされているところからも、瓜子姫は「(水)神の授かりもの」としての子どもであることがわかる。

V、機を織る

大きくなった瓜子姫は機を織る。多くの話では瓜子姫が機を織る様子を表現する。そして、その機織り場面にアマノジャクが侵入し、その後アマノジャクが瓜子姫に化けて機を織ることになる。機織りはこの物語にとっては重要な場面であり、瓜子姫にとっては重要な属性である。

この瓜子姫の属性がどのように表現されているか類話を見ていると、「毎日機を織る」「とんからりと喜んで機織りする」と日常生活場面として描かれているもの、「上手」「うまい」「機織りの名人」のように、瓜子姫の機織り技術が優れていることを述べているものもある。「七歳になり機を買ってもらい」「機織りを習って」と成長過程の出来事として描かれているものがある一方、「婆が川で瓜を拾い持ち帰って箆笥の中にしまっておくと、夜中に（中略）音がする。箆笥を開くと姫が機を織っている（関、1978、pp.89-90）」「(瓜を)櫃の中に入れておき爺がもどったので蓋を取ると瓜が姫になって機織りする（同、p.93）」と異常誕生を象徴する特別な存在であることを示すエピソードを載せている。生まれた時から機織りする特別な能力を持った子ども、すなわち神からの申し子であることが強調される。また、「機織りが上手で、すぐに村

一ばんになり」、毎日「一生けんめいに機を織って、いつもたまげるような反物を織りあげました。爺さまも婆さまも、おかげで町へお寺詣りに行けるようになって（関、1956a、p.11）」「りっぱな布を織り出していた。（中略）その家はよい身代になった（関、1978、p.94）」「瓜姫が機を織っていると機織り虫や雀が来て手伝い、爺はその反物を売って金持ちになる（同、p.106）」と瓜子姫の機織りのお蔭で爺婆の生活が豊かになったことを物語る話も見られる。

「機を織る女性の原像は、天の服織女や太陽の巫女である天照大御神が神衣を織っていることに見られるが、折口信夫は神に仕える女性が村落から離れた所に隔離されて、水辺で神の着る衣服を織りながらその訪れを待っている神の嫁にあるとしている。（中略）一方、村の家々には軒ごとに機があり、布を織るのは主婦の仕事であった（稲田ら、1994、p.740）」という。

柳田（1962）は、「桃太郎」の鬼が島征伐に匹敵する「異常の事業」として、この機織りを挙げている。この機織りとは、本来神を祭るために優秀な美女を忌み籠らせて神の衣を織る仕事を指しており、「遠い神代の忌機殿の物語を始として、その機織には障碍の多いものと考えられて居た。それを押切つて大切なる神の衣を織り上げることが、か柔い女性の勝利であつた（p.86）」という。この物語の場合、「姫の事業が既に完成に近くなつて居た（p.87）」その時に、瓜子姫の敵であるアマノジャクが、「ちやうどこの最も大切な時刻に出現して、殆ど姫の事業の根本を覆へさうとした（p.88）」と柳田（1962）は考察している。

柳田が瓜子姫の嫁入りを神の衣を織る＝神との結婚と捉えているところは興味深い。幸福な結末である「姫は救い出され、殿様に嫁入りする」は姫の事業が無事成就したことを示し、姫が殺される場合は姫の事業は不幸にして完遂しなかったことを示すと考えれば、姫の属性として機織りが不可欠であることと正反対の結末が存在することは納得できることである。

また、姫の事業についてこうも考える事ができるのではないか。「桃太郎」の話では鬼退治で持ち帰った宝物のおかげで爺婆は豊かになり幸せになった。「桃太郎」の鬼退治という事業は爺婆を幸せにすることであった。「瓜子姫」の話も類話にあるように瓜子姫の類まれな機織り能力によってすばらしい反物を作り、爺婆が豊かになり幸せになった。事業の目的が爺婆を

幸せにすることであるなら、機織能力のすばらしさそのことが鬼退治に匹敵する事業と理解できるのではないだろうか。

一方、関(1974)は瓜子姫の機織りを「結婚資格としての機織り」とし、「機織は女性のすべてに課せられた社会生活上の任務であり、そのために婚姻の条件の一つでもあろう」とし、瓜子姫も「婚姻の過程を語った昔話である(pp.123-124)」と考察する。

機織りができることが成人女性の条件だとすれば、機織りは瓜子姫が結婚に値する女性に成長したことを示す。関が「婚姻の過程を語った昔話」と述べているように、アマノジャクの侵入や暴行は、結婚に至るための文字通り生死を賭けた試練と理解することもできる。そのようにとらえると、世界各地にある「偽の花嫁」と共通のテーマを持つ昔話として考察することが可能である。

瓜子姫は瓜から生まれた特別な子どもである。爺婆は神から授かった申し子である瓜子姫を大切に育てる。この神とは日々の仕事や生活の中で信仰している氏神(水神)である。神の申し子として並はずれた機織り技術を持ち、爺婆の暮らしを豊かにする。爺婆はその幸せを奢ることなく感謝の気持ちで受けとり、日々の暮らしが進行する。その中で嫁入りが行われる。爺婆にとってめでたいことであるが、その幸せを阻む存在が登場する。それがアマノジャクである。

VI、爺婆の不在

アマノジャクは爺婆の留守に侵入する。留守にする理由は「嫁入り支度の買い物に行く」「嫁入り道具を買いに行く」「嫁入りの衣裳を借りに出かける」「姫の好きな野老を取りに行く」「姫の好きな苺を取りに行く」「山に行く」などさまざまであるが、嫁入りを前提とした爺婆の外出であることを窺わせるものが多い。

柳田(1962)は前述の論を進めて外出の理由の一つとして挙げられる駕籠の用意から「織姫が祭の式に参興することを、具象化したもの」で、「神の御衣を織り成したる處女は、當然に神の御妻と解せられて居たらしい(p.88)」と考察する。

留守にする時、爺婆は姫に注意の言葉を投げかける。「あまんじゃくという人食いが来るから戸を開けるな」

「『ひとり居ると天邪鬼という悪い女が来るかも知れないから用心せよ、天邪鬼は爪が長く、とてもお前はかなわないから、返事をしないほうがよい』とおしえて窓や戸に掛け金してくれただけど(関、1978、p.86)」。また、「瓜姫」(関、1956a)では「そのころ、天邪鬼という悪い奴がいて、大人の留守に娘のいるところにやって来て、娘にのりうつりました。天邪鬼が乗りうつると、おとなしい娘も気立が変わって、不器用な娘になりました(p.11)」という地の文の後「『誰が来ても、おらが帰るまでは、二階だって戸をあけちゃいかんよ』(p.11)」と注意をする。

爺婆にとって大切な子どもを一人家に残しておく親としての心配が伝わる。心配のあまり「姫をつづらに入れて出る」と嚴重に隠しておく行為もある。なぜなら子どもを狙う恐ろしい存在が想定されているからである。親は子どもが危機に会わないように万全を尽くすが、親不在というどうしようもない時に子どもが死に至る事故や事件が生じる。

この場面での爺婆の注意は、グリムメルヘンの「おおかみと、七ひきの子やぎ」の母やぎや「白雪姫」の小人とのやり取りを思い起こさせる(グリム兄弟:高橋訳、1976)。「おおかみと、七ひきの子やぎ」では母やぎは家を留守にする時子どもたちを呼んで狼には気をつけるように、狼が入ってきたらみんな食べられてしまうと注意して出かける。しかし狼は巧みに家の中に侵入し1匹を残してみな食べてしまうが、母やぎが狼のおなかから全員を助け出すという話である。この話は母のいない時に起きた子どもの危機を最終的に母の力で解決、子どもを守ることができた話である。「白雪姫」では小人は仕事に出かける間一人になる白雪姫にままた母の妃に気をつけるように誰も家に入れてはいけな^いと言ってきかせる。しかし白雪姫は妃を家の中に入れてしまい妃の罠にはまってしまう。倒れている姫を助けてもう一度誰も家に入れてはいけな^いと言ってきかせる。2回目までは小人が白雪姫を助けることができるが、3回目で白雪姫は死んでしまい、小人は助ける事ができなかった。親代わりの保護者としての小人は姫を救うことができず、姫の亡きがらの傍で姫の死を悼む日々を送る。そこに王子が登場する。

グリムメルヘンの二つの話の結末の違いは何だろうか。それは守るべき子どもの発達の違いによると思われる。「おおかみと、七ひきの子やぎ」は親の言いつ

けを守る幼児ほどの年齢である。親の守りの中で生きていく時期である。一方「白雪姫」は思春期の年齢である。親の言いつけだけでなく子ども自身の欲求から行動する面も出てくる。そのため親の思い通りに行かない子どもの行動が生じ子どもを守りきれない場合が出てくる。

この話も爺婆の留守、即ち守りのうすい時を狙って瓜子姫のいる所に侵入する。瓜子姫は初め爺婆の言いつけを守ろうとするが、「指一本はいるだけ」「もう一本はいるだけ」という巧みなアマノジャクの言葉かけに負けて「指が二本はいるだけ開けてやっても何のこともないから」と思って開けてしまい、アマノジャクが家の中に侵入するのを許してしまう（関、1956a、p.12）。

Ⅶ、アマノジャクと瓜子姫

柳田（1962）は瓜子姫の敵であるアマノジャクについて、「神の計畫の妨碍者であり、しかも通例は『負ける敵』であつたことは、弘く他の民間傳承にも認められて居る」とし、「意地が墮くて常に神に逆らふとはいふものの、固より神に敵する迄の力は無く、しかも常に負ける者の憎らしさと可笑味とを具へて居た」、「神の正しさと最後の勝利とを鮮明に理解せしめる爲に、假説せられたる對立者」であり、「謂はば瓜子姫の苦心經營を細叙する爲に、特に作り設けられたる相手の名（pp.88-89）」と考察している。

柳田（1962）はアマノジャクについて神に匹敵する力は無いと述べているが、瓜子姫にとってはどうなのだろうか。

『瓜姫』（関、1956a）では、アマノジャクが家の中に飛び込んできて、瓜姫は驚いて気を失ひひっくりかえり、気がついた時は元の瓜姫ではなくアマノジャクが乗り移って恐ろしい顔をしていたという。あつという間に乗り移られてしまい、瓜子姫は為す術もない。一瞬の出来事であった。

Ⅱの関の話では、アマノジャクはいやがる瓜姫子をだまして、桃もぎに誘う。瓜姫子は爺婆に叱られるからといってもきかない。「草履をはいて行けば、ぼんぼんと鳴るから」と言えば「下駄こはいて行こうよ」と言う。挙句、アマノジャクの背中に瓜姫子は追われて出かける。まずアマノジャクが桃の木に登り自分は

美味しいのを食べ、瓜姫子には汚いのばかり投げてよこす。今度は瓜姫子をだんだん木に登らせて高い所まで来た時おどかすと瓜子姫は動転して木から落ちて死んでしまう。

瓜姫子は行きたくない理由をあれこれ言うが、アマノジャクにすべて言い負かされて、桃取りに行くことになる。結局アマノジャクに策略とも言える言葉に騙されて殺されてしまう。

同じくⅡの柳田の話では、アマノジャクは姫を誘い柿の木谷へ柿を取りに行く。最初は木の上から渋い柿を投げつけ、次に姫に汚い自分の着物を着せて、柿の木の高い枝に縛りつける。

この話では殺されるまでいかなが同様にアマノジャクに言われるまま木に縛りつけられる。

他には「しゃばん（組板）と庖丁を持って來させて、其しゃばんに瓜子姫子を載せて、庖丁で切つて食つてしまつた（柳田、1962、p.98）」「代り番こに虱取りをすつと言つて、姫子をサイバンの上に寝させて切つて食べてしまつた（同、p.100）」など、アマノジャクが家に来てすぐ食われる等殺されてしまうか、やり取りがある場合でも、すぐ主導権を取られ瓜子姫はアマノジャクに言われるまま木の上に縛りつけられるか、食われてしまう。二人の関係はかなり一方的な力関係であることが分かる。「とてもお前にはかなわない」と爺婆がいうように、瓜子姫にとってアマノジャクは太刀打ちできる相手ではなく、言われるままに動くしかない。アマノジャクの前では瓜子姫は全く無力である。

瓜子姫は「叱られるといやだ」と爺婆の言いつけを守る素直な良い子である。一方のアマノジャクは初めから騙す（殺す）つもりで瓜子姫に近づく。疑うなど考えもしない瓜子姫があつというまにアマノジャクの手にかかってしまうのは当然と言えば当然である。それほど瓜子姫は穢れのない真っ白な存在である。そこにいわば真っ黒なアマノジャクが付け狙ったともいえる。

また、アマノジャクが瓜子姫に入れ替わった様子の違いについて見ていると、「てんからかん」という瓜子姫の機織りに対して、偽の瓜子姫は「じゃんがらじゃんがら」と騒々しく機を織る（関、1956a）、瓜子姫はところ芋のひげを一本一本むしって食べるのに対して、偽の瓜子姫はひげもむしらないでそのまま食べる、瓜子姫はむかごを「針の先に少し」食べると言うのに

対して、偽の瓜子姫は「厩桶に三杯食う」と言うなど、全く異なる様子が対比する形で強調される。

以上のことから、瓜子姫にとってのアミノジャクはいわば瓜子姫の影（河合、1987）と考えることができる。素直な良い子の表の人格を補償する裏側の人格であり、表の人格があまりに真っ白すぎるために裏側の無意識の人格は真っ黒なのである。善そのものであるかのような瓜子姫に対立するものとして全く正反対の悪そのものといえるアミノジャクが布置される。素直で優しいばかりの一面的な人格に対して、影（アミノジャク）が容易に侵入し自我（瓜子姫）を乗っ取る。関（1956a）のアミノジャクの説明のようにまさに「のりうつる」のである。そしてアミノジャクが乗り移ると「おとなしい娘も気立てが変わって、不器用になる」。いわゆる二重人格といえる現象がおきる。交替人格のアミノジャクが前面に出て、瓜子姫人格が意識の背後に退く。

河合（1987、p.96）は「影のほうもひとつの人格として存在を主張し、自我と影とがときに入れ代わるようなことになってくる」と説明している。二つの人格がうまく統合されることが望まれる。ある意味二つの人格は一度死んで、その上で新しい人格、すなわち全くの白でない少し黒い所もあるアミノジャク的な要素も取り入れた瓜子姫が新たに生まれる必要がある（註7）。

瓜子姫にとってのアミノジャクは確かに太刀打ちできない相手である。瓜子姫が無防備にアミノジャクと出会った場合、食われるか殺されるしかない。死の脅威を与える存在であるが、そこを切り抜ける事ができれば、より強さをもった瓜子姫へと生まれ変わることができるのではないか。

VIII、偽の花嫁を見破る

瓜子姫に化けたアミノジャクは爺婆の家で機を織る。そして多くの類話では嫁入りのために駕籠に乗って瓜子姫の縛られている木の下を通る時、木に縛られている瓜子姫または鳥が駕籠に乗っているのは偽の花嫁であることを知らせ、本当の花嫁が駕籠に乗り嫁入りをする。

ここでは、瓜子姫に化けたアミノジャクを爺婆がどのように見破り瓜子姫を助ける事ができたのか、その

ためには何が大切なのかについて考えたい。

関（1956a）では、瓜子姫の機織りの音や芋を食べる様子が変だと思いつつ裏の畑に出てみると、一羽のきれいな小鳥が「瓜姫の機に天邪鬼がのったいよ」と鳴いて、初めて爺が気づく。柳田（1962）でも芋を食べる様子がおかしいので怪しいと思うが気がつかずアミノジャクが駕籠に乗っていると子どもが囁き笑うことでわかる。爺婆は瓜子姫の様子がいつもと違うのに気づきつつ、偽者と見破ることができない。

「爺と婆が帰り顔を見るとあまんじゃく。瓜姫の居所を聞き出し柿の上から瓜姫をおろして、あまんじゃくを木に縛る（関、1978、p.94）」「いつもと違うので婆が不思議に思って、山へ行って姫を見つけて救い出す（同、pp.91-92）」など、爺婆が危険な目に会っている姫を救い出すことができている類話も多い。爺婆が瓜子姫を積極的に守る力があること、そしてそのベースにある愛情を感じる事ができる。また、偽者の瓜子姫がわがままばかり言うので爺婆が怒って捨てに行くところに縛られている瓜子姫を見つける類話（同、p.98）もある

しかし多くは爺婆が偽の瓜子姫だと気づくためにはあやしいという疑惑を確信にするものが必要である。本当の瓜子姫からの「私はここにいる！」というSOSが必要なのである。「苺を食べさせるとわしづかみする。怪しんでいると木の上で爺婆を呼ぶので、主（アミノジャク）を追い出し姫をおろしてやる（関、1978、p.90）」「裏の畑で姫の泣き声」や「柿の木で泣いている」ところを発見して助ける事ができる。

アミノジャクが偽の瓜子姫として駕籠に乗り木の下を通るまで、瓜子姫はずっと木の上に縛られたままで過ごす。吹きさらしの高い樹の枝に縛られて孤独の世界を耐えなければならぬ。爺婆に守られた温かな生活をしてきた瓜子姫にとってかなり過酷な状況である。

その苛酷な状況の中から、偽の花嫁の乗った駕籠がちょうど下に来た時に、姫の声が上から聞こえる「吾が乗りて行くのに、アミノジャクこそ乗りて行くかや、ピーロロロロ（柳田、1962、p.77）」「姫のる駕籠へあまんじゃくこそ乗って行くがや（関、1978、p.101）」「瓜姫御寮は木の枝に、あまんじゃくは駕籠の中（同、p.98）」「織姫主の玉の輿、ああ口惜しやほろほろ（同、p.97）」「あまんじゃくばかり駕籠に乗ってよーよー

(同、p.100)」と。これらの瓜子姫の言葉で偽の花嫁が見破られる。

自分が助かるためには自分が声を出さなければならぬことを、瓜子姫は身を持って体験した。そして、姫は嫁入りの駕籠に乗るのである。そのように考えると、生死の狭間の中で木に縛られて一人で過したことは「自分の内面に向き合った時」とも理解する事ができる。「手なし娘」など他の多くの昔話の女主人公が結婚前に自分の内面に向き合ったのと同様のことがこの昔話でも生じており、結婚前の大切な過程と考える事ができる(千野、2012)。

また、瓜子姫の状況を知らせてくれる動物として「鳥」が登場する。「鶏が『瓜姫さんは木の葉に、あまんじゃくが着物着て』と鳴いて爺婆に知らせる(関、1978、p.103)」「鳥が『瓜姫は柿の木に縛られてあまんじゃくは駕籠で嫁入りかあかあ』と鳴いた(同、p.103)」のおかげで偽の花嫁を見破り、瓜子姫を助ける事ができる。あるいは「木の上の鳥が『瓜姫の乗る駕籠にあまんじゃくが乗ったいや』と鳴く(同、p.107)」など瓜子姫が殺されたことを知らせるものもある。しかしそれだけでなく「ほんとうの姫の左手が鶯になって『瓜子姫子だとてあまのじゃくが化けて嫁に行く。おかしであ、ほうほけきよ』と鳴いて化けの皮がはがれ殺される(同、p.116)」と瓜子姫が鳥となって知らせるといふものもある。ここで登場する鳥はすべて偽の花嫁を知らせるものであり、瓜子姫のたましいともいえるし、爺婆の動物の援助者ということもできる。偽者かどうかを見抜くためにこのような鳥の声にも耳を傾けることが必要である。鳥は人間の意識を越えた何かを理解し、聞く耳を持つ人間にはそれを教えてくれる。

同じく「偽の花嫁」のモチーフを持つ日本昔話「鬼のむこ」「白鳥の姉」を取り上げて、真実を見抜くにはどうすればよいのかを考えたい。両昔話とも男女の関係がテーマとなる(註8)。「鬼のむこ」(関、1956b、pp.151-155)は偽りの妻をどうして見抜けなかったのかと問いかける。殿様の妻となった主人公を姉が嫉妬して泉に突き落として殺してしまい、殿様の妻になりすます。次の日、本当の妻は鰻となり、その鰻を殿様は捕まえて料理させた。殿様が運ばれた料理を食べようとしたら生にえて食べられなかった。茶碗の中の鰻が口をききだした。「頭が煮えているか、煮

えていないかわかるあなたが、どうして自分の妻が代わっているのがわからないのですか」。本当の妻から夫への痛烈な批判である。夫婦である以上本当の妻かどうかわかるのは当然であると。どうすればそれが可能となるのか。そのヒントが「白鳥の姉」(関、1957、pp.90-96)にある。主人公は殿様に嫁入りするようになっていたが継母に殺される。継母は代わりに実子を花嫁にして嫁がせる。白鳥となった姉に弟は会いに行く。弟のおかしい様子を感じていた殿様が弟に事情を尋ねる。事情を聞いた殿様も弟と共に白鳥となった姉に会いに行き、どうすれば人間に戻れるのかを尋ねる。殿様は主人公の言う通りにすると白鳥は人間の姿となり二人は結婚する。殿様は積極的行動的に本当の妻を取り戻そうとする。爺婆と瓜子姫の関係も同じである。

「偽の花嫁」のテーマは女性の結婚課題というより、男性の結婚課題と考える事ができる。男性は偽の花嫁を見破り、本当の花嫁を見つけなければならない。瓜子姫においては、爺婆が本当の瓜子姫を見つけなければならない。そして、瓜子姫の課題は、誰にも守られないことのない一人の世界で自分の内面に向き合うことである。それによって、心の成熟とともに悪にも向き合える力を持つことができる。

Ⅷ、結末

ここでは、瓜子姫が殺されてしまう話の結末について取り上げたい。

柳田(1962、p.103)の挙げている話の最後は「そして爺様と婆様は又二人つこになつた」。このきわめて簡潔な文章が爺婆の心情を物語る。爺婆と瓜子姫の何気ないしかし幸せな日常が突然奪われたのである。瓜子姫の失った爺婆の心情ははかりしれない。

爺婆の悲しみは次のような展開に繋がるものもある。「二人は悲しんで仇討ちに行き、家の出口に大石をつるして帰る。雨が降ってあまのじゃくが家に入ろうとして石が落ちて死ぬ(関、1978、p.108)」。最後に爺婆が怒ってアマノジャクをいじめて殺す類話もある。瓜子姫を失った心情を仇討ちとして、怒りで解決する。

瓜子姫が殺された直後の状況は爺婆にとって耐えがたいものではなかったのか。特に東北で語られている殺され方は尋常ではなくきわめて残酷である。その後

もずっとその悲しみを持ち続けて生きて行かなければならない。

しかし、瓜子姫が死んだ後次のような展開をもつ話がある。「瓜子姫を埋めたところから梨の木が一本はえてくる。梨の木は上がったり下がったり動くようになる。殿様が通りかかり、礼をやるから芸をさせてみるという。『あがれ、さがれ』という梨がいうとおりに動く（関、1978、p.99）」「瓜子姫の体は時がたつにつれて、長いふくべに変わりました。それからというもの、爺さまと婆さまの畑にできる胡瓜は、葉一枚ごとに必ず胡瓜が一本ずつなるようになったそうである（関、1956a、p.14）」。死後もなお爺婆を思う瓜子姫の気持ちが伝わる。それとともに、爺婆の心の中に持ち続けた瓜子姫への愛情と悲しみが浄化されて一つの形になった話とも感じられる。

最後に、初めにあげた「そして爺様と婆様は又二人つこになつた」話を再度とりあげたい。この二人は子どもがほしいと神様に願掛けをした。そして瓜子姫を見つけ神様の授りものだと喜んで拾って大事に育てた。二人の留守に狼がやって来て姫を包丁で切り食べてしまった。瓜子姫に化けた狼は帰って来た二人に瓜子姫を煮た汁を食べさせた。最後に狼は「板場の下に置いた（瓜子姫の）骨を見ろ」と真実を言って逃げに行った。そして初めの文になる。爺婆と瓜子姫の三人の暮らし、ささやかな幸せを感謝して生活する二人から大事な姫を奪うという残虐な行為が行われる。その行為者は狼という形で表現されているが、個という善悪を越えた自然であるのかもしれない。時に過酷になる自然に為す術もなく、その状況を受け入れて行くしかない。自然と向き合って生きていく爺婆にとって、良いことも悪いことも含めてありのままを受けとめて生きて行くことがある意味宗教性に通じるのかもしれない。

X、終わりに

本論では、日本昔話「瓜子姫」について爺婆の物語という視点から考察を行った。子どものいない爺婆から始まる昔話が多いが、物語の展開の中でその子どもが殺されてしまう昔話はないのではないだろうか。瓜子姫の多くは助け出され結婚する。語られていないがその結婚を我が事のように思う爺婆の喜びがあ

り幸せがある。その一方で、子どもが陰惨に殺されて二人ぼっちで残された爺婆の悲しみと不幸がある。その違いを分けるものは何か。爺婆の守りの力なのか、瓜子姫の心の強さなのか、あるいは敵であるアマノジャクの悪の凄さなのか。

東北の話に登場する敵はアマノジャクだけでなく山姥や狼も登場する。また、西日本では瓜子姫は助け出され、アマノジャクは退治される話が多い。それに対して東北の話では、瓜子姫は食われてしまい、アマノジャクは爺婆に対しても囃したてて逃げてしまう。同じ登場人物であるにしても二つの力関係がずいぶん異なるように思う。その土地の持つ気候風土それにとりなう歴史文化が反映していると仮定せざるをえない。それについては猪野氏、荒木氏、藤井氏の研究に詳しく今後の研究の発展に期待したい。

筆者は、長い年月口から口へと語り継がれてきた作者のいない昔話に関心を持ち続けて来た。そこには個を越えた心の普遍性が表現されていると考えるからである。日本昔話を読み込むほどに見えて来たのは、爺婆を始めとした登場人物から感じられる日本人のもつ精神性あるいは宗教性である。筆者が感じているある種の宗教性というものが、「瓜子姫」に簡潔に語られる結末の中に深く感じる事ができた。

註

- 註1：天邪鬼、天の邪鬼、アマノジャクなどの表記があるが、文献からの名前はその表記にならない、本論ではアマノジャクで統一する。アマノジャクそのものについての考察は本論では行わない。
- 註2：瓜子姫という名前も瓜姫、瓜姫子など類話によって異なるが、文献からの名前はその名前のままで、本論では瓜子姫で統一する。
- 註3：猪野（1978）は南太平洋上の原住民の間に行われる「ハイヌウェレ型」と呼ばれる農耕起源神話との類似性について論じている。そして瓜子姫伝承は焼畑農耕文化を基盤とする原始神話の構造と要素をよく保存しているとし、瓜子姫説話の原型は、日本において、イモ類を主作物とする原始焼畑農耕文化の神話として、次に雑穀焼畑農耕文化の影響を受けて話の内容が変化し

たという非常に興味深い論を展開している。さらに荒川（2004）は瓜子姫とアマノジャクの類似性を挙げて、瓜子姫が絹の機織女であるのに対して植物繊維の機織の女神がアマノジャクの元型だとし、それぞれ異なった神話世界をもつ二つが出会い、葛藤と変容というべき現象が起き物語に反映されたとする。また、藤井（2013）は「ハインヴェレ神話」から「瓜子姫」がどのように現代の型へと変化していったのかについて論じている。

註4：関（1974）は「＜瓜子姫＞は、日本独自の昔話であるかのごとく考えられていたが、同じくヨーロッパ・アジア型の昔話の一つである＜三つのシトロン＞（AT408）の亜型であり、わが＜瓜子姫＞は＜白い花嫁黒い花嫁＞との複合型である（p.124）」と述べている。

註5：題は不明

註6：類話として、柳田（1962）と関（1978）が収録している話から取り上げる。詳しい内容を載せる場合は収録された地域または文献のページ数を載せる。加えて、関（1956a）が編集した昔話集の「瓜姫」からも参照する。この昔話集には語られた全文が掲載されている。爺婆の視点から語られている話である。ただし、関（1978、p.107）にも掲載されており、それに「後半に改作の跡がある」とあり、この話がすべて語られた話ではない可能性もある。

註7：小林（2015、p.104）は柳田のアマノジャクの特徴「相手を困らせることで自分に関心をひきよせようとする」について、「甘えたくても甘えられない」子どもたちが対処行動のひとつとして母親に対して振る舞う『挑発行動』そのものであると考察する。また松村の指摘「嫌われ者と見なされる一方で『トリックスター』的要素があること」を挙げ、臨床家として興味深いと述べている。この昔話でアマノジャクのトリックスター的要素を持つ類話をあげる。「殿様の手先のあまんじゃくは、女中を仲間にして姫の部屋に忍び込む。指が入るだけ、顔が入るだけといってだんだんとだまして入り込み、姫を連れ出して殿様に差し出す。姫はあまんじゃくが気に入ってそばに置くようになる。爺婆を

呼び寄せ殿様の嫁となって一生幸せに過ごす（関、1978、p95）」。

註8：類話では「若者と一緒に姫を探して帰る。それからあまのじゃくを捕えた男と夫婦になる（関、1978、p.105）」「（鶯の助けで）鴛がその後を追って松の木に縛られた栗こ姫を見つけ助ける（同、p.115）」と具体的に結婚の相手が登場する。

文献

- 荒川理恵（2004）二人の機織女：瓜子姫とあまのじゃく 学習院大学上代文学研究 29 18-34
- 藤井倫明（2013）瓜子姫の誕生 —アマノジャクの悲劇— 立正大学大学院日本語・日本文学 13 18-27
- グリム兄弟編：高橋健二訳（1976）グリム童話全集 I・III 小学館
- 稲田浩二（1988）演習版・日本昔話タイプ・インデックス 同朋社
- 稲田浩二（1992）「瓜姫」系譜考 女子大國文 112 67-82
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編（1994）〔縮刷版〕日本昔話事典 弘文堂
- 猪野史子（1978）瓜子姫の民話と焼畑農耕文化：大野晋・祖父江孝男編 現代のエスプリ 臨時増刊号 日本人の原点 至文堂 pp.186-222
- 河合隼雄（1977）昔話の深層 福音館書店
- 河合隼雄（1982）昔話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄（1987）影の現象学 講談社
- 小林隆児（2015）あまのじゃくと精神療法：「甘え」の理論と関係の病理 弘文堂
- 関敬吾編（1956a）こぶとり爺さん・かちかち山 日本の昔ばなし（I） 岩波書店
- 関敬吾編（1956b）桃太郎・舌きり雀・花さか爺 日本の昔ばなし（II） 岩波書店
- 関敬吾編（1957）一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎 日本の昔ばなし（III） 岩波書店
- 関敬吾（1974）ヨーロッパ昔話の受容—＜白い花嫁黒い花嫁＞を例として：長谷川泉・長野^{しょう}菅一編 日本の説話第6巻近代 東京美術
- 関敬吾（1978）日本昔話大成第3巻 本格昔話二 角川書店
- 千野美和子（2012）日本昔話「手なし娘」にみる精神性 京都光華女子大学研究紀要第50号 29-39

- 千野美和子（2013）日本昔話「たにし長者」にみる信
仰 京都光華女子大学研究紀要第 51 号 13-24
- 高木昌史（2013）[シリーズ/比較民話]（一）瓜子姫
/三つのオレンジ 成城文藝 222 45-64
- 柳田國男（1962）定本柳田國男集第 8 卷 筑摩書房

